

平成三十年十二月

交通安全子供作文集

小・中学校児童生徒の作文第四十一集



ぼくのつうがくろ

一般社団法人 愛媛県交通安全協会

後 援 愛媛県教育委員会

は し が き

愛媛県交通安全協会・県内十八の地区交通安全協会では、愛媛県教育委員会の後援により、小・中学生を対象に、毎年交通安全に関する作文を募集しています。この趣旨は、小・中学生の情操教育に資するとともに交通安全についての関心を高め、子供の交通事故防止を図ることを目的に、昭和五十三年から実施しているもので、本年は小・中学校併せて百二十三校から二千八百一編という多数の応募がありました。

応募作品について、地元の地区交通安全協会の第一次審査を経た七十九編を、愛媛県交通安全協会の第二次審査で四十二編選定し、更に愛媛県教育委員会に第三次審査をお願いして厳正な審査の上、愛媛県交通安全協会入選作文として二十五編を選んできました。

作文は、子供たちが身近に体験したこと、家族や友達が交通事故の当事者になったことなど、交通安全の大切さについて、素直にかつ切実に訴える内容となっております。

今回、入選作品二十五編を「交通安全子供作文集」第四十一集として発刊するに当たり、第四十集の副題であつた「愛」をシンボルマークとし、副題は入選作品を代表して、今治市立乃万小学校一年生の小林由翔こばやし ゆいとさんの「ぼくのつうがくろ」とさせていただきます。この作文集が家庭、学校及び職場において、一人でも多くの方に読まれ、交通安全への関心と認識をより一層高めていただければ望外の喜びです。

応募していただいた多くの小・中学生の皆様には、作文集発刊のために御協力いただいた関係者の皆様に厚くお礼を申し上げます。県民の皆様には、今後とも交通安全協会の活動に御理解をいただき、一層の御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成三十年十二月

一般社団法人 愛媛県交通安全協会会長 矢野 精 一

愛媛県交通安全協会入選作文目次

「小学生の部」

ぼくのつうがくろ	今治市立乃万小学校	一年	小林 由翔 こばやし ゆいと	1
ぼくとかあさんのあいことば	愛南町立城辺小学校	二年	砂田 琉成 すなだ りゅうせい	2
気をつけてね	今治市立近見小学校	三年	吉田 壮佑 よしだ そうすけ	3
ふだんから安全に	内子町立石畳小学校	三年	山本 遥斗 やまもと はると	4
事故になってあせる気持ち	西条市立壬生川小学校	四年	越智友咲菜 おち ゆさな	5
みんなで守ろう交通ルール	西条市立橘小学校	五年	松賀 結愛 まつが ゆいな	6
まさかの事故	西条市立壬生川小学校	六年	別宮 乃愛 べつぐく のあ	7
かもしれない運転	砥部町立砥部小学校	六年	古川実咲樹 ふるかわみ さき	8
自転車大会から学んだ交通安全	内子町立内子小学校	六年	一宮 もこ いちみや もこ	9
災害によって	宇和島市立玉津小学校	六年	毛利 怜介 もうり りょうすけ	11

「中学生の部」

交通事故を防ぐために

尊い命

「安全に通行できる道」

交通事故のない世の中にするために

交通マナーの大切さ

「交通安全」

自転車に乗る時の心掛け

「ちよとぐらい」が危険のもと

「父と献血」

あの日から学んだこと

「自分の命は自分で守る」

交通安全について

「自主返納のススメ」

私の願い

車の免許返納は必要？

西条市立西条東中学校	一年	宮竹 一慶	12
今治市立伯方中学校	一年	清水 さくら	13
愛媛大学教育学部附属中学校	一年	中田 陽也	14
愛媛大学教育学部附属中学校	一年	野本 帆希	16
松山市立久米中学校	一年	大山 さくら	17
宇和島市立城東中学校	一年	三宅 樹生	19
新居浜市立川東中学校	二年	依岡 暖記	20
西条市立小松中学校	二年	大西 風花	22
愛媛大学教育学部附属中学校	二年	岡 愛奈	23
愛媛大学教育学部附属中学校	二年	明日 孝允	25
愛媛大学教育学部附属中学校	二年	今西 創大	26
松山市立内宮中学校	二年	越智 望愛	28
愛媛大学教育学部附属中学校	三年	三原 心春	29
松山市立高浜中学校	三年	九鬼 千夏	31
八幡浜市立真穴中学校	三年	松良 凜々子	32

愛媛県交通安全協会入選作文（二十五編）

【小学生の部】

ぼくのつうがくろ

今治市立乃万小学校

一年 こばやし ゆいと

しょうがつこうに、にゅうがくして、はじめてじぶんであるいてがつこうにいくようになりました。ようちえんのころはおかあさんとくるまでいっていました。じぶんであるいてがつこうにいくようになって、さいしよはとってもふあんでした。だけど、はんちようさんや、おにいちゃん、おねえちやんが、

「あぶないよ。」

とか、

「まっすぐあるいてね。」

とか、

「はしってわたるよ。」

つていってくれるので、あんしんして、がつこうに、いくことができます。じぶんひとりだったら、きがつかないこともあぶないこともたくさんあるとおもいます。だから、おにいちゃんと、おねえちゃんのいうことは、しつかりきいています。

がつこうからかえるときは、おにいちゃんやおねえちゃんはいません。だけど、いわれたことをちゃんとおもいだして、しつかりまもってぼくは、いえにかえっています。いえ

にかえると、おかあさんが、

「おかえり。」

といってくれます。おかあさんの

「おかえり。」

をきくとほつとあんしんします。こうつうあんぜんは、たくさんのかまりがあるけど、ちゃんとまもって、こうつうじこにあわないように、きをつけたいです。



ぼくとかあさんのあいことば

愛南町立城辺小学校

二年 すな田 りゅうせい

「気をつけてね。行つてらっしゃい。」

「気をつけて行つてきます。」

これは、いえを出る時のぼくとかあさんのあいことばです。四月二十日に学校で、こう通あんぜん教室がありました。こう通あんぜんきょう会やけいさつの人たちがたくさんきて、しんごうきの見かた、おうだんほどのわたりかたなどを教えてくださいました。さいしょは、うんどう場でれんしゅうしました。ぼくは、五年生のおにちゃんと手をつないで歩きました。しんごうが青になったのをかくにんして「右、左、右」を見て、手をあげておうだんほどをわたるれんしゅうをしました。つぎに、学校のまわりのどうろに出て歩きました。車がたくさん通っていました。ドキドキしましたが、教えていただいたルールを思い出しながら、しんちようにおうだんほどをわたりました。

いえにかえておかあさんに、

「今日、こう通あんぜん教しつで、『右、左、右』を見て、手をあげておうだんほどをわたるれんしゅうをしたよ。」と、話したら、

「なぜ、手をあげてわたるとよいのですか。」

と、しつもんされました。すこし考えて、

「子どもはせがひくいから、うんでんしゅさんに見えにくいけど、手をあげると大人のせの高さくらいになるから、うんでんしゅさんにも見えやすく、すぐに気がついてもらえるか

ら。」

と、こたえると、

「すごい。よく分かつているから、下の子のお手本になれるね。」と、ほめてもらいました。

ぼくには、三年生のおねえちゃんがいて、いっしょにほけんふくしセンターにあそびに行きます。その時ぼくは、おねえちゃんに、

「走らない。前をしっかり見て歩く。『右、左、右』をかくにんしてわたりなさい。」

と、よくちゅういされていました。でも、こう通あんぜん教しつで教えてもらい、おかあさんにもほめてもらったので、下の子のお手本になれるゆう気が出てきました。

二年生になって、じてん車にのれるようにもなりました。まだ、ふらふらしてへたなので、どんなことに気をつけたらいいか、おかあさんといっしょに考えました。そして、三つのルールをきめました。一つ目は、ヘルメットをかぶって頭をまもることです。二つ目は、スピードを出さないことです。三つ目は、どうろをわたる時に、「右、左、右」をかくにんしてじてん車からおりて、おしてわたることです。

それから、いえを出る時は、

「気をつけてね。行つてらっしゃい。」

「気をつけて、行つてきます。」

と、二人のあいことばをかわすことになりました。これから、歩く時も、じてん車にのる時も、こう通ルールをまもること、たいせつないのちをまもりたいです。おかあさんとあいことばをかわして、今日も元気に行つてきます。

気をつけてね

今治市立近見小学校

三年

吉田 壮佑

「気をつけてね。いってらっしゃい。」

この言葉は、お母さんがぼくが学校に行く時や遊びに行く時に毎回言う言葉です。

とくに、自転車で遊びに行く時は他にもたくさん言われます。ぼくが短い道の角をまがるまでお母さんは見ていて「左右見て、スピード出さないようにゆっくり行くんよ。」「川のはしは通らないんよ。」「車に気をつけなさいよ。」とこれでもかというぐらいちゅういしてきます。そして、さい後に「気をつけてね。行ってらっしゃい。」とぼくにとつてはトドメの一言がやってきます。毎日毎回言われるから「もう分かってるよ。うるさいな。」と思ってしまう事があります。でも、もちろん「気をつけてね。」と言ってくれている理由を考える時や、わかる時もあります。

それは、ニュースでぼくと同じぐらいの小学生が学校に行く時や帰り道で交通事こにあつて、ケガしたり死んでしまったことを聞いた時です。お母さんの「気をつけてね。」の言葉がよくわかるし、「ありがとう。」って言いたくなります。

夏休み中でも、お父さんがし事に行く時も、おばあちゃんが家に来てくれて、帰るときも、「気をつけてね。」とお母さんは見おくっていました。ぼくは、「もう大人だから、気をつけることぐらいわかっているだろう。」と、思っていたので、「どうして、いつもみんなに『気をつけてね。』って言うん。」と聞くと、お母さんは、

「毎回言っていたら、その言葉が記おくにのこつて、何かの時に気をつけよって思うことない？お母さんもおばあちゃんに小さいころから言われていたよ。今日も一日がんばって、気をつけて家に帰ろうって思っていたよ。だから、一日がんばった壮佑が、家にぶじに帰ってきてほしいから毎日言っているんだよ。」と話してくれました。お母さんにとって、「気をつけてね。」は想いがたくさんつまった言葉だと感じました。

ぼくが今まで、事こなく、元気ですごしているのは、お母さんの「気をつけてね。」の言葉が、心にひびいているからだと思います。

これからも、毎日、毎回、ぼくに「気をつけてね。」といってください。おかあさん、これからもよろしくおねがいします。



ふだんから安全に

内子町立石畳小学校

三年 山本 遙斗

ぼくの家のまわりは、道路をそんなにたくさん車が通ることはありません。それでも、朝、学校へ行くと中、車があぶないな、と思うことはあります。

たとえば、ぼくたちが一れつにならんで歩いているすぐ横をすごいスピードで走っていく車にたまに会います。そんなとき、一年生もいっしょにいるのにこわいな、と思います。また、通学はんのまち合わせ場所は、道路が分かれ道になったところにあるのですが、そこをきゆうにまがってくる車もあります。こつちには来ないだろうと思っていたら、カーブでまがって来てびっくりすることもあります。

そう考えると、毎日の登校や下校でも、ぜったいに安全ということはないのかな、と思います。三年生のぼくは、通学はんの中で上から二人目なので、あぶなそうなときは早く一年生に知らせなければいけません。

きょ年の夏には、こんなこともありました。親子活動でしまなみ海道をサイクリングしたときのことです。一れつにみんながならんで進むので、しぜんと長いれつになっていました。交差点に入ろうとしたとき前の人からおくれないようにいそいでいたぼくは、信号が赤にかわったことに気づきませんでした。そのまま交差点にのり入れようとしたとたん、後ろから、

「こらっ。」

という大きな声が聞こえてきて、ぼくはギクツとして止まり

ました。車がとまってくれているのでたすかりましたが、後ろで見ているお父さんたちは、「はねられる」と思ってたわかったそうです。ぼくは、みんなの前でお父さんからきつくしかられました。その時はくやしかったけれど、ぼくがわるかったので、あたり前です。ふだんは、信号きを見てわたる、ということがほとんどないので、いつもと同じように考えてしまったことがいっぱいでした。

交通安全教室では、信号きのある交差点をわたるれん習をします。また、自てん車にのるれん習もします。どんなときでも、どんな場所でも、交通安全教室で習った通りにしないときけんなことがあるんだな、と思いました。これから、自分の目でまわりの様子をかくにんすることをわすれないようにしたいです。

さいごに、車を運てんする人へのおねがいです。ぼくたちが歩く道は、あまり広くなくて、歩道もないところがほとんどです。車が通るときは、思いきつてはしの方へよったりその場に止まって車が通りすぎるのをまったりしています。でも、はしの方にはみぞがあると多くて、落ちそうでこわいことがあります。どうかぼくたち子どものすがたを見たときは、スピードをおとしてください。

事故になつてあせる気持ち

西条市立壬生川小学校

四年 越智 友咲菜

「どうしよう。どうしよう。」心ぞうがドキドキしました。パニックになりそうになったあの時のあせりは、今でも忘れられません。

一年前の夏、私は事故にありました。家の前の歩道で兄と競走をしていました。兄は走って、私は自転車に乗っていました。交差点に差しかった時私は左右をかくにんして曲がつたつもりでした。しかし、右から来た車にせつしょくしてしまいました。「痛っ。」思わず声が出ました。自転車は私の体からはなれて飛んで行きました。「大じょうぶ？」と、車の人がとまって声をかけてくれたことは覚えています。でも、近所の人や通りかかった人たちが集まって来て、「どうしよう。」というあせりの気持ちがどんどん大きくなっていきしました。父がすぐに来てくれて、病院へ連れて行ってくれました。左足に青あざができていて、左手の人さし指と親指の間から血が出ていました。頭はヘルメットが守ってくれ大じょうぶでした。

病院で先生に「友咲菜さんもしませんでしたね。」と言われ、はつとしました。私はきちんと左右をかくにんして、たし、車の方がいけないと思っていたけど、競走に夢中になっていた私は十分に車を見ていなかったのだと気付かされました。

病院から帰ると、家で待っていた母や祖母におこられました。今、思うと、私のことをとても心配してくれていたんだ

なと思っています。大きなけがをしなくてすんだからこそその思いがよくわかりました。

事故にあう前は、何となくかぶっていたヘルメットですが、今回の事故でヘルメットをかぶっていなかったらどうなっていたかと思うと、自分の命を守るために大切なものだと思感できました。

事故にあつてから、私は、ヘルメットをかぶる意味を考えながら自転車に乗っています。交差点では一度止まってから、左右を自分の目でかくにんしています。信号のあるところでは、青になつてもすぐにわたらず、もう一度左右を見てからわたるようになっていきます。また、遊ぶ場所や遊び方もよく考えるようになりました。もう、同じようなことでドキドキしたり、家族にめいわくをかけたりしたくありません。何より自分の命は、自分でしっかり守ります。

時々、私は事故のことを思い出します。そのたびに、安全な自転車の乗り方ができているか、心の中でチェックしています。友達と遊ぶときには忘れそうになるときもあるけれど、事故にあったからこそ、私が心がけていることを友達にも伝えたいです。

みんなで守ろう交通ルール

西条市立橘小学校

五年 松賀 結愛

私は、今、登校班の班長をしています。毎朝、家を出る時、お母さんが、

「行つてらっしゃい。車に気を付けていくのよ。」

と、私が見えなくなるまで手をふつて見送つてくれます。私もわかったわかったと思ひながら、

「行つてきます。」

と、家を出ます。登校班のみんなと合流すると、時々後ろを見ながら、

「前をちゃんと見て歩いてよ。二列にならんと一列で歩いてよ。」

と、声をかけています。私が登校している道は、横断歩道も信号機ありません。しかし、まっすぐの長い道や、坂道や、くねくね曲がっていて先が見えにくい道がたくさんあります。ストップマークもたくさんあります。私は、登校班みんなの安全をつねに確認しながら歩いていきます。

最近、ニュースや新聞で、登校中に自動車や自転車に登校班に突つこんできたという報道をよく聞きます。大けがをした人や、命を落とした人もいます。まさか学校に行く途中で事故にあうなんて考えられません。

でも、私が登校している時、登校班の横をスピードを出した車が通つて危ないなと思つたことがあります。私が、危ないのに、なぜこんなにスピードを出すのだらうとおどろいていると、地域の安全ボランティアの方が、こんな話をしてく

ださいました。

私たちが歩いている道は、まっすぐな道で見通しがよく、対向車もあまり通らないため、スピードを出して走りやすいのだそうです。それを聞いて、歩いている私たちも気を付けなければ、と思いました。安全ボランティアの方も、毎朝会

うと、

「車に気を付けて行つてらっしゃい。」
と、お母さんと同じように声をかけてくれます。たくさん地域の人が、私たちのことを見守つてくれています。私は、これからも感謝の気持ちをわすれないで、登校班の班長としてみんなの安全を守りたいです。

次に、私には、家族みんな決めてある交通ルールがあります。お父さんは、お酒を飲んだら、絶対に車を運転しないこと。お母さんは、車を運転しながらスマートフォンを絶対に操作しないこと。弟と妹、そして私は、自転車に乗る時は、絶対にヘルメットをかぶること。そして、前をよく見て、一列で走ることです。当たり前のルールですが、自分の意思が弱いと、少しぐらいならだいじょうぶだろうと破つてしまい、重大事故を起こすかもしれないです。必ず守るよう、家族みんな

で声をかけ合うようにしています。
学校の交通安全教室で、交通ルールは、車を運転している人だけでなく、自転車に乗っている人も、歩いている私たちも、みんなが守らなければ事故はなくならないと教わりました。私は、家族や地域の方が見守つてくれていることに安心しないで、班長としてみんなのお手本になるように、進んで交通ルールを守りたいと思います。そして、家族みんな

めた交通ルールもしっかり守って、事故を起こしたり、事故にあったりしないようにしたいです。



まさかの交通事故

西条市立壬生川小学校

六年 別宮 乃愛

六年の一学期、私は生まれて初めて交通事故にあいました。事故にあったのは、学校に行くときに必ず通る信号のある交差点でした。「まさかの交通事故」でした。

その日の朝も、集団登校をしていて、その交差点で信号待ちをしていました。班長である私は、信号が青になるのを確認して横断歩道に出ました。そして、班長旗を広げてみんなを渡らせようとした、そのときです。信号無視のバイクが正面からぶつかって、私ははねられました。一瞬のことで、何が起こったか分かりませんでした。気が付くと、道路に倒れていました。通りがかった人たちが助けてくれて、私は救急車で運ばれました。

けがは軽くて、その日に病院から帰ってくる事ができましたが、後から体のいろんなところにあざや痛みが出てきて、しばらくの間は大変でした。

ふだん、通りなれている見通しのよい交差点で、しかも信号が青のときに事故にあうなんて思ってもいなかったのですが、びっくりしました。後で、警察の人が来て、現場検証をしたときに言われたことは、「当然、信号無視をした相手が悪いに決まっている。でも、信号が青だからといって信号だけを信じて横断歩道を渡るのは危ない。だから、周りを確認しながら横断歩道をわたってほしい。」ということでした。青信号は「進め」ではなく、「進むことができる」という意味だそうです。だから、青信号でも、周りの安全を確かめて進ま

ないといけません。

このことで、交通事故はいろいろな状況で起こるのだと分かりました。私は今まで、自分が交通ルールを守っていたら事故にあうことなんてないと思っていました。でも、「自分だけ、自分さえできていれば大丈夫」とか「車がバイクがとまってくれるだろう」という考えは勝手な思い込みで、間違っていたのだと分かりました。

また、いつもの道だから大丈夫だろうと思っていても、危険はいつばい潜んでいるのだと思いました。だから、一人一人が「きつと大丈夫だろう」ではなく、「もしかしたら飛び出してくるかもしれない」「もしかしたら見てないかもしれない」という意識をもたないといけません。この意識をもてば、少しでも交通事故を減らすことができると思いました。

私は今まで、班長であることをそんなに大変だと思っていませんでしたが、今では下級生を無事に小学校まで連れて行くという、とても責任のある役目だと思っています。あのとき、事故にあったのが他の子ではなくてよかったです。私は軽いけがですみましたが、もし、お年寄りの方や小さい子だったら、もつと大けがをしていたかもしれません。それだけでなく、命を落とす可能性さえあったかもしれません。

私は今回、自分自身が交通事故にあったことで、たくさんのことを学びました。たった一つの命を、交通事故の一瞬でむだにすることなく、みんなで守り合い、安全な毎日を送らなければなりません。

かもしれない運転

砥部町立砥部小学校

六年 古川 実咲樹

私は、四年生の五月、やっと自転車に乗れるようになりました。それから、あまり乗っていなかったのですが、春休み中の今年の三月、自転車で家の近くをぐるぐるしたり、図書館に行ったりしていました。

そんなある日のことです。私は家が近くなったので、道路の左側から右側に行かないといけませんでした。軽トラックがこちらに曲がってきたことを知っていたので、その軽トラックが私より前に行ったら、右側に行こうと考えていました。そして、その軽トラックが前に行ったので、ハンドルを右にきると、「ピーピーピーッ」後ろから聞いたこともない大きな音でクラクションが鳴りました。びっくりして後ろを向くと、車がいきました。どうやら軽トラックの後ろにもう一台、車がいたようです。私はあわてて「ごめんなさい」をくり返し、頭を下げました。そして、そこから家までは、自転車をおして、歩いていきました。

私も、曲がり角などでは止まって、気を付けて走行していました。でも、命に関わりかねないような事が起こってしまいました。それは、今回の場合、「一台しか車は来ていないだろう」という油断から生まれた事だと思っています。その車の人も、「自転車、気を付けないとな」などと思っていたと思うので、とてもしてはいけないことをしてしまったなど、反省しました。

自転車を運転するとき、車の運転のときにも使える運転のしかたを、お母さんが教えてくれました。それは、「かもしれない運転」です。「車がここから飛びだしてくる『かもしれない』や、私の体験したことと言うと「もう一台後ろに車がいる『かもしれない』など、「くかもしれない」と予測して行動することで、少しは事故を防げるのではないかなと思います。私は、「一台しか車は来ていないだろう」と自分に都合のいいように考える「だらう運転」になっていたんです。

この「かもしれない運転」、全国に広まるいいなと思います。そうすれば、みんなが交通安全に意識を持つようになり、悲しい事故も少しは減らすことも可能だと思いました。

交通事故は、いつ、どこで起こるか、そして、いつ自分の身にふりかかるかわかりません。それに、自分が気を付けていても、残念ながら起こることだってあります。前にも書いた「かもしれない運転」はもちろん、交通ルールをしっかり知って、一人一人が守って安全運転で、正しく楽しく車や自転車などに乗ってほしいなと思いました。自分も今回のことを教訓に、これからも安全運転で自転車を運転したいと思います。

自転車大会から学んだ交通安全

内子町立内子小学校

六年 一宮 もこ

みなさんは、「交通安全子供自転車全国大会」という大会をご存知ですか。私は、小学四年生まで、その大会のことを全く知りませんでした。四年生になったある日、いつものように登校してきた時に、体育館下のピロティで、自転車の練習をしている六年生の姿が目にとまりました。そして、その六年生たちは、「交通安全子供自転車全国大会」出場を目指し、毎日、朝早くから練習していることを知りました。その一生懸命な姿を見て、私も興味をもつようになりました。

この大会は昭和四十一年から開催されており、今年で五十回を数えました。毎年、都道府県大会で優勝した四十七チーム百八十八名の選手によって競技が行われます。競技内容には、大きく分けて、学科テストと実技テストがあります。学科テストでは、交通規則や自転車の安全な乗り方などが問われます。実技テストには、交差点の正しい通り方など交通法規に従った乗り方をチェックする安全走行テストと、S字走行やジグザグ走行などを行って、乗り方の熟練度をチェックする技能走行テストがあります。

自転車練習を始めたばかりの頃は、「どんな練習をするのだろう。」と思っていただけで、交通ルールもほとんど知りませんでした。自転車で乗るのも、家の近くをたまに乗る程度で、そんなに上手ではありませんでした。少しずつ、競技内容を知るようになり、「学科でも、実技でも、高得点をとれるようになりたい。」と思い始めました。そのために、毎

朝早く学校に行って練習し、昼休みや放課後も時間のある限り、学科の勉強や自転車の練習に励みました。私は、特に実技のジグザグ走行に苦戦しましたが、地区大会では、個人、団体ともに一位になり、また、県大会では、個人二位、団体一位の成績を収め、念願の全国大会出場の切符を手に入れました。そして、八月八日に、東京ビッグサイトで行われた全国大会では、個人入賞は逃したものの、チームメイトと協力し、団体五位に入賞することができました。この大会を通して、仲間との絆を感じることができました。そして、何と言っても、小学生のうちに、自転車の交通ルールを完ぺきに身に付けることができました。このことは、これからの生活においても、交通事故を防ぐのに大変役に立つと思います。約二年三ヶ月間、ひたすら自転車練習に取り組んできて本当に良かったです。

世間では、残念なことに、毎日、交通事故によって命を落としたり、けがをしたりする人がたくさんいます。これくらい大丈夫かなとちょっと油断したり、時間に間に合わないからとついスピードを出し過ぎたりした時に事故が起こりがちです。一人一人が、きちんと交通ルールを守り、安全運転をしていると、大半の事故は防げられると思います。だから、交通ルールを知らないのはいけないことだと思います。運転技能が未熟なものも困りものです。車や自転車などを運転するのなら、運転者が責任をもって、しっかりと勉強したり、練習したりする必要があります。そうしないと、人の大切な命までうばってしまう危険性があるということを知らなければなりません。

しかし、子どもは、なかなかそうはいかないかもしれません。先日、母がこんな話を話していました。私が放課後の練習を終える頃、車で迎えにきてくれていた時のことです。夕方なので、いつもゆっくり走行しているらしいのですが、前方から、小学一年生くらいの男の子が自転車に乗ってやってきていました。その子は、道路の左側ではなく右側を、バランス悪く、ふらふらと走行していたそうです。その子が徐々に近づいてきて、母からその子の様子がよく見えるようになって、その子はしっかりと前を見ておらず、よそ見していることに気がきました。そして、母はすぐ、車を右よりに停車させたそうです。その子は、母の車のすぐそばになってやつと気付き、停車している車にもぶつからなくてすんだそうです。母はぶつかってくるのではないかとドキドキしたそうです。以前、前を見ないで自転車に乗っている子がいるという話を聞いていたそうです。同じ子だったかもしれないし、そういう子が複数いるのかもしれない。きつとその子は自転車の正しい乗り方を知らず、運転の技能もかなり未熟なのだと思います。そして、何より、自転車の危険な乗り方は、命取りになることにも気付いていないのだと思います。小さな子どもは、自分の自転車の乗り方が危ないことを分かっているかもしれないもあるかもしれませんが、まわりの大人たちが、安全な乗り方を教えてあげたり、危ない時も、「危ないよ。」と教えてあげたりしなければならぬと思います。私は、自転車大会を通して、交通安全について学ぶことができました。この貴重な経験を生かし、これからも、交通事故防止に努めていきたいです。

災害によつて

宇和島市立玉津小学校

六年 毛利 怜介

七月七日、西日本豪雨によつて起こった土砂災害によつて、毎朝歩いてた道路が海に落ちた。

その日の朝、ぼくは雷のような音に目を覚ました。それは雷ではなく、激しすぎる雨音だった。すでに父の姿はベッドになかった。消防団員である父は、警報が出たからと言って朝三時に家を出ていた。避難指示の放送を聞き、おどろきをかくせない母と避難所へ向かう途中、信じられないほどくずれた山が目飛び込んできた。みかん畑がなくなっていた。ひどい状況だった。避難所にいた八十才のおばあさんも

「こんなひどい災害は見たことがない。」

と言っていた。ぼくはこれからどうなるのかと不安になった。それと同時に、この災害が登校中でなくて少しほっとした。登校中だったら大きな被害が出ていただろう。

そもそも、ぼくたちの通学路は山道で、信号もなく、歩道と車道の境目もない。一見して危ないと思われる通学路である。それでも、歩く自分たちはもちろん、車を運転する地域の方たちもみんなが気をつけて安全を保っていた。しかし今回の災害で、道は土砂にうまり、海に落ちた。さらに、あわただしく走り回るトラックに、地理に不慣れな他県からの車など、安全を保ちにくい状況へとすっかり変わってしまった。このままの状況で学校が再開されたとしたら、と考えてみる。登校班の班長であるぼくには、下級生を安全に連れて行くと

いう責任がある。今まで以上に安全に注意することが必要だと思った。そこでふと、一学期に行った交通安全教室のことを思い出した。あの時、自転車の点検の仕方や乗り方など実際にやってみる活動以外にも、交通ルールの大切さや交通事故のことにについても教えていただいていた。

交通ルールと交通事故。あの時はあまり深く考えなかったが、今はちがう。インターネットで調べてみた。

すぐにたくさん情報が出てくる。僕たちと同じ十代の事故が多いこと、小学生の下校時間の頃に交通事故が多いことなど。また、昨年は愛媛県内で四千五百件以上の交通事故が起き、七十八人の人が亡くなっていた。もう何十年の間、交通事故の起きなかった日は一日もないということも知った。

時間がたち、雨はおさまったが、山はくずれて、橋は落ちた。登校していた道路は、ガードレールがいくつもくずれて、まだ直っていない。すっかり変わってしまったぼくたちの環境。これまでと同じように安全を保つためには、交通安全に対する意識をいっそう高めるとともに、下級生にも交通ルールの大切さ、事故のこわさ、そしてこれまでより危険な状況になっていることを伝えていきたいと思う。そして、地域が復興し、事故のない日が続くことが、今のぼくの願いである。

【中学生の部】

交通事故を防ぐために

西条市立西条東中学校

一年 宮竹 一慶

「交通安全」というテーマについて考える時、私にはいつも思い出す事があります。それは小学四年生の時に起こりました。

その日、私は駄菓子屋に向かって、猛スピードで自転車をこいでいました。そして、一緒に競争していた友達を追い越して引き離し、そのまま真っ先にゴールするはずでした。

ところが、交差点を横切ろうとした時、急に黒い車が来たのです。一瞬だったのに、運転手の大きな目がはつきり見えました。私は生まれて初めて「死ぬんじゃないか。」と感じ、ブレーキを握りしめて、車の数センチ手前でなんとか止まりました。おかげで、事故は寸前で免れましたが、私はびっくりしすぎて、しばらく声も出ませんでした。

「なぜあの時、競争なんかしたんだろう。なぜそんなスピードで交差点に突っ込んでしまったんだろう…。」思い出すと、いつもいやな気持ちになります。もうこんな怖い思いはしたくありません。

それからずいぶん時間が過ぎ、中学生になった私に、今度はヘルメットの安全性について、考えさせられる事が起きました。

私は、毎日自転車で通学しています。しかし、慣れてしまったからか、ヘルメットをかぶるのが面倒になってきてしまいました。そして数日前の朝には、「今日はヘルメットをかぶらず出発して、学校の近くに來たらかぶるようにすればいいか。」と考えていました。

その時、テレビから、「自転車の事故。少年が死亡。」というニュースが聞こえてきたのです。私はドキッとしてテレビを見ました。すると、母が

「お前と同じ年齢のお子さんが、自転車で道を横断していて、車にはねられたそうよ。ヘルメットをかぶっていなかったんだって。」

と、教えてくれました。

偶然にも私と同じ年齢の子だったこともあって、すごく身近な事のように感じました。もし、今日ヘルメットをかぶらなければ、私の身に、さっきのニュースと同じことが起こるかもしれないのです。

そして、もうひとつ。このニュースから、重要なことを思い出しました。「あの時、ヘルメットの顎ひもを付けていなかった…。」

そうです。私は小学四年生のあの日、スピードを出しすぎたうえに、ヘルメットもちゃんとかぶっていませんでした。もし、車と私がぶつかっていたら、大事故になっていたはずなんです。私は中学生になることもできなかつたかもしれない。

私は、ヘルメットを取り出してかぶり、顎ひもをしっかしめました。「なんだ、面倒だと思っていたけど、たった数秒でできるじゃないか。」やってみたらとても簡単なことで

す。この体験から、「交通安全」というのは難しそうな言葉ですが、本当は簡単で、当たり前のことをするのが大切なのだと知りました。

このように、私たちの周りにはたくさんの危険が潜んでいます。私が元気に生活できていることも奇跡なのかもしれませんが、交通事故というのは自分の気が抜けて、当たり前のことができなくなったり、やってくるのではないのでしょうか。これから私も「交通安全」への意識を習慣にして、事故のない毎日を過ごせるようにしたいと思います。



尊い命

今治市立伯方中学校

一年 清水 さくら

私には、大学生の兄がいます。その兄が中学の時、下校途中に自転車事故にあいました。兄は、バスで駅まで四十分、それから自転車で十五分ほどの約一時間かけて毎日、中学校まで通っていました。三年間、皆勤賞で通いました。

天気の良い日ばかりではないので、三年間は大変だったと思います。そんな兄が入学したところ、兄から「交通事故にいい自転車がつぶれた。大きな車ですぐ市内まで来て。中学の先生には自分ですぐ電話かけとくから。すぐ来て。」と電話がありました。

私と母は、祖母の家で大きな車を借り、すぐ市内へ向かいました。その時の母は、おこった顔をしていて、おにババー全開。だから私は、ずっと息をひそめ、一言もしゃべらずとなりに座っていました。

夕暮れ時で、外はオレンジ色に染まりかけていて、しみなみ海道がとてもきれいでした。

だんだんと市内に近づき、大通りのはしっこで兄と中学校の担任の先生の姿が見えてきました。兄は大きく手を振ってきました。その時、母の目から大つぶの涙がずっと流れていました。私には、なんで母が泣いているのか意味が全く分かりませんでした。でも今の十三才の私には、あの日の母の涙の理由が分かった気がします。きっと、すごく心配で心配でしかたなかったのに、元気そうな兄を見たとなん安心したんだろうな。いつも私達を心配してくれる母を見ていて気付き

ました。

あの時、母と担任の先生は、「自転車がつぶれたくらいで本当に良かった。体が無事で良かった。自分で警察や中学校にすぐ連絡してきた事はえらいぞ。」と兄は言われていました。母がずっと泣いていたのも私の中では印象に残っています。

命は、どんなにくやんでも、どんなにお金を払っても、事故で死んでしまうと、二度と戻ってきません。一つしかない尊い命を誰もが大切にしないといけないと改めて実感しました。私の家族は、あの事故の後、交通事故がまた起きないように、家族で話し合いました。

「周りを確認すること」

「一時停止は必ずすること」

「兄の中学では、ヘルメットをかぶる校則はなかったが、友達がかぶってなくても、兄はヘルメットを絶対かぶること」など、それまで意識しなかった事に、人一倍、注意するように話し合いました。まだ小さかった私には、ピンときませんでした。今となれば、あの時の母の気持ちが痛いほどよく分かります。

また、あのころ、反こう期たった中だった兄も、今では、車と大型バイクの免許をとり、母の誕生日にサプライズでレンタカーを借り関西から帰ってきます。兄には、いつまでも心配してくれる人がいることを忘れないで欲しいです。尊い命だということを。

「安全に通行できる道」

愛媛大学教育学部附属中学校

一年 中田 陽也

僕が初めて自転車に一人で乗れたのは三才の時です。幼稚園の時には補助輪をつけてしまなみの橋を渡ったこともあります。横断歩道はよく注意して渡り、自動車に気を付けて急がずあせらず絶対に事故にあわない自信があります。

しかし、そんな僕の自信が揺らぐことが中学校に入学してすぐに起こりました。僕は中学校に自転車で行っています。入学前から自転車の安全な乗り方や通学についての注意事項など、学校からも親からもたくさん話を聞きしっかり準備をしていました。また、通学路は時々通る道だったので危ない所もわかっていました。

ところが、いざ学校が始まると同じ時間に大勢の人が通学通勤で移動するため、それまでは危ないと感じていなかった側道から急に自動車が出て来て慌てたり、スピードを出した高校生の自転車にぶつかりそうになったりと想像していた以上に通学路には危ない瞬間がたくさんありました。また、僕が安全な運転を心がけていても事故に巻き込まれる危険がすぐ近くにあるとも感じました。

残念なことに僕の家の近くは狭い道が多いです。一列に並んで登校する小学生も、自転車で通学する中高生も、会社に行く車の大人もみな同じ狭い道を通るしかありません。道路にはそれぞれを隔てるポールやガードレールもなく、ニュースで時々見る登校中の児童の列に自動車が出っ込んで小学生が犠牲になっている道路はこのような場所なのかなと感じ

じるほです。

安全に通行できる道とはどのようなものだと皆さんは思いますか？僕は歩行者と自転車と自動車それぞれ分かれて通れる道が一番安全だと思います。しかし、もう何十年も狭い道を今すぐに整備してもらえとは思えません。では、狭い道でも安全に通行するためにはどうすればいいでしょう。おそらく多くの人は答えがわかっていると思います。狭い道では交通ルールを守るだけでなく、お互いが思いやりを持って行動することです。

僕も交通ルールを守り思いやりを持って自転車に乗っているつもりです。しかし、家を出るのが遅くなって慌てて自転車に乗っているとき、他の人のことをよく見て運転できているのか自信がありません。スピードを出している自転車や自動車の人も、学校や会社間に合わないかもと焦る気持ちで回りがよく見えていないのかもしれないかもしれません。

朝出かけるときに母は必ず

「気を付けてね。」

と言います。みんなが元気で家に帰ってくるためのまじないの言葉のようです。この作文を書くまでは毎朝繰り返し返される同じ言葉に深い意味を感じていませんでしたが、朝通学路で会うたたくさんの人たちも家を出るときに同じような言葉で送り出されているのでしよう。

母の祖母は交通事故で突然亡くなりました。料理上手で編み物の得意なおばあちゃんだったそうです。お弁当を作ってもらって出かけたり、編み物を教えてもらえたりと楽しい思い出がたくさんあるといえます。そして、亡くなって二十年

以上も経つのに母は今でもおばあちゃんに何の恩返しもできなかつたと寂しそうな顔をします。事故はほんのさ細な気の緩みから起こるのだと僕は思います。あの時はいつもと違って家を出たのが遅くて慌ててたからとか、まさかそんなところで事故に遭うと思わなかったとか。自分の気の緩みが誰かを悲しませる大きな事故につながるかもしれないと本当にわかっていたら、もっと注意をして自動車を運転したり、歩行者も飛び出したりしないのではないのでしょうか。

僕は交通違反をしている人をたくさん見かけます。赤信号なのに信号を無視して渡る人。押しボタンを押さず渡る人。また、信号のない横断歩道で待っている時はなかなか車が止まってくれません。なぜ交通違反とわかっていても違反をする人がいるのでしょうか。我先にと急ぐ車は交通弱者を優先してくれる気持ちになぜ芽生えないのでしょうか。

僕は子供のころに見たアニメで印象に残っている言葉があります。

「一回軽い気持ちで違反してしまえば二回目三回目とどんどん何も思わず違反してしまいます。最初の一回目の過ちを犯さないことが大切なのです。」

もしあなたの知り合いが交通違反をしていたら注意してあげてください。自分が交通違反をしていると思っていないかもしれませんが。「気を付けて。」と送り出された人は自分だけでなく、ほかの人にも特に高齢者や小さい子供に気を付けてあげてください。みんなが元気で家に帰れるように思いやりをもって安全に通行できる道をみんなで作りましょう。

交通事故のない世の中にするために

愛媛大学教育学部附属中学校

一年 野本 帆希

日頃、交通事故があったことを知らせるニュースや新聞記事をよく聞いたり見たりする。私は、そのたびに胸が痛くなり、この事故は防ぐことができなかったのだろうかと思える。私は、交通事故を防ぐために、一人一人が「自分が誰かにけがをさせてしまうかもしれない。」という責任感を持って通行することが大切だと思う。

私は、小学校低学年のとき、父の車に乗っていて、後ろから車がぶつかってきたという事故を経験したことがある。突然、後ろから鈍い衝撃が走り、一瞬何が起こったのか分からなくなった。パトカーや、警察の人と深刻な面持ちで話している父の姿をぼんやり見ていたことを今でも鮮明に思い出すことができる。あのときは、たまたまランドセルを背負ったままシートベルトをしていたので、けがをせずに済んだが、もしもシートベルトをしていなかったらどうなっていただろうと考えるだけでぞっとする。おそらく、ぶつかってきた後ろの車の方は、前をよく見ておらず、運転以外の別のことに気持ちが向いていたのだと思う。運転する人に、運転に対する責任感、緊張感があればこの事故は防ぐことができたのではないかと思う。

また、去年の十二月に、母が自転車で走行中にバイクと衝突し、ろつ骨を五本骨折するという全治二ヶ月のけがを負った。私は、事故発生時は自宅にいたため、帰ってくる母を待つことになったが、帰ってきた母はいつもの明るい母ではな

く、笑顔が消え、誰かに介護してもらわないと生活がままならない状態になっていた。バイクの方が一時停止しなければいけないところを止まらなかったそう。母がヘルメットをかぶっていなかったら、母の命はなかったかもしれない。この事故もバイクの運転手の方の「相手が止まってくれるだろう。」という無責任な気持ちから起こったのだと思うが、それと同時に、必ずしも自分より強い乗り物のほうが止まってくれるというわけではないと強く思い知らされた。

今示した二つの事故とも、運転手が緊張感、責任感をしっかりと持って走行していれば防ぐことができたと考えられる。このように、どんな事故でも少しの意識の違いで防ぐことができると思う。

警察庁がまとめた「平成二十六年中の交通事故の発生状況」によると、交通事故原因の一位は「安全不確認」なんだそう。だ。「安全不確認」とは、「一時停止や減速はしたのに十分な安全確認を怠ったために交通事故が起こる」ということだ。この「安全不確認」が交通事故原因の約三割を占めているので、安全確認をもれなく行うことを一人一人が気をつけられれば、交通事故は三割減少するということだ。

冒頭で、「自分が誰かにけがをさせてしまうかもしれない」という責任感を持つことが大事だと記したが、それは大抵、自転車やバイク、車に乗っている場合だ。私は、歩行者の場合では、自分で自分の命を守ることが大事だと思う。母がバイクと衝突した事故から分かるように、「相手が止まってくれるだろう」という考えでは、交通事故が起きる可能性が高くなるといえるだろう。「自分は歩行者だから」と交通事故

に対する緊張感をなくしてしまっただけはいけない。自分で周囲の安全を確認することが大切だ。

最近、「歩きスマホ」という言葉をよく耳にしたり、実際にスマートフォンを見ながら歩いている人を見かけたりするが、これは、自分の命を落とすかも知れない、大変危険な行為である。手元のスマートフォンにしか視線が向けられていないため、自分の身の回りの危険に気付かず、交通事故にあうということが多くなると思う。運転以外のことに気がすると危ないという意味では、歩行者以外の乗り物の場合でも同じことが言えるだろう。

私は、徒歩で通学したり、自転車を使って習い事に通ったりしている。そこで、今後私が安全に通行することができるよう、自分にできることを考えてみた。

○相手が止まってくれるだろうと考えず、左右の安全確認と一時停止を心がける。

○自転車に乗るときにはタイヤやブレーキなどの点検をしつかり行い、ヘルメットを必ずかぶる。

○自転車に乗るときは、歩行者優先だということをよく考えて走行する。

○自転車を運転中は運転のことだけに集中し、細心の注意を払う。

これらのことをよく頭に置き、これからの生活で安全で快適な通行ができるように気をつけたいと思う。また、一人一人が自分が気をつけなければならぬことをよく考え、今までの行動を見直してほしいと思った。

交通マナーの大切さ

松山市立久米中学校

一年 大山 さくら

私は自転車の運転がとても苦手です。小学生のころから、友達と遊ぶ時や習い事に行く時に自転車を利用していたけれど、いつまでたっても慣れませんでした。小回りがきかないし、両足がしつかり地面につかないとブレーキをかけた時にふらついてとても怖いのです。

こんな状態で中学生になり、自転車通学が始まりました。まわりの友達は長い期間乗れるように少し大きめの自転車を買っていました。が、運転が下手な私は大きめの自転車なんてとんでもない話で、今の自分の身長に合った自転車を選びました。新しい自転車に慣れるために何度も試運転し、中学校までの道のりも確認しました。そして、いざ登校初日、ヘルメットを正しくかぶり、荷物を背負って自転車に乗りました。想定外だったのは、荷物が重すぎたことです。自転車の練習はしていたけれど、荷物の重みでフラフラし、とても不安な中で出発しました。実際の通学時間帯は車がとても多くて、同じように自転車通学する学生、徒歩通学の小学生も多く、とにかく慎重に運転していきました。初日は自分のことに必死でまわりの状況は見えていなかったように思います。そして、雨の日はもつと大変で、視界は悪いし、車の量がさらに増えるし、何より白線の上でのブレーキはツルツルすべってかなり危険だとわかりました。三ヶ月がたち、毎日の往復の中でいくつか気付いたことがあります。まず朝の登校時

は車の運転が怖く感じます。どの車もとても急いでいるようで、信号のない横断歩道ではなかなか止まってもええません。そして同じくらい危ないのは自転車に乗る学生です。国道ぞいを数珠つなぎで走っている自転車の中には、信号を無視していく人もいて、私も一度ぶつかりそうになりひやっとしました。そういう私も自転車に少し慣れてきた今、信号のない十字路で完全停止すると次のスタートがしんどいので、徐行して走ってしまうことがあります。これも一歩間違えれば事故につながります。

私の住む愛媛県の警察のホームページによると、平成二十九年中の自転車事故件数は約六百七十七件で、年齢別にみると、一位が高齢者、二位が高校生、三位は中学生だそうです。そして事故の一番多い時間帯が、午前八時から午前十時であることから、朝の通勤通学の時間は特に注意する必要があります。

人は生まれてきてから最初に受けるのが交通安全教育だと思っています。歩き始めたらず『止まれ』を学び、道に飛び出さないこと、右左右右を見て渡ること、信号を守ることなど、少しずつ交通ルールを学んでいきます。小学生のころに二回、交通安全教室を受けました。一回目は道の歩き方教室で、人形が車にはねられて飛ばされる瞬間を目の前で見ました。鳥肌がたつほどの恐怖を感じたのを、今でもよく覚えています。自分がこんなことにならないように、必ず教えてもらったルールを守ろうと思いました。二回目の自転車教室で、ヘルメットを正しく着用すること、二人乗りはしないこと、左側を一列で走ることなどを学びました。交通ルールを守るとは、

命を守るための重要なきまりなのです。でも、自分一人だけが守っていたのでは、決して安全ではありません。日常生活をより安全安心にするには、車も自転車も歩行者も、すべての人が気を付けて、社会全体でルールを守っていくことが大切です。

また、交通ルールだけでなく、交通マナーも大切だと思います。たとえば、私の家から国道に出るまでの道はとてもせまくて危険です。自転車に乗っていて車が近付いてくると、私はできるだけはしに寄って止まるようにしています。すると、車のドライバーがありがたうと頭を下げてくれることがあります。もし私が止まらなかったら、ドライバーはイライラして無理やり追い抜こうとするかもしれません。お互いにゆずり合うことで、気分よくスムーズに通れるし、事故も防げると思います。また、高齢者が自転車に乗って道のまん中を走っているのをたまに見かけます。どうしてもはしを走らないのか疑問に思っていました。私の曾祖母も病院まで自転車で通っていたので、ある時間いてみると、「おばあちゃんははしっこを走ってるつもりなんよ。」という予想外な答えが返ってきました。これを聞いて私は、もっと高齢者の気持ちを考えるべきだったことに気付かされました。将来私が車を運転するときにきたら、無理に抜かそうとせず、待ってあげたいと思います。

事故を防ぐためには、交通ルールを守るのはあたり前のことで、マナーを忘れてはいけません。一人一人が周囲の人への思いやりの気持ちをもって、ゆずり合える社会にすることが大切だと思います。

「交通安全」

宇和島市立城東中学校

一年 三宅 樹生

僕はその瞬間何が起こったかわかりませんでした。気が付いたら、歩道に倒れ、頭から血が出ていたのです。小学校一年生の時のことです。僕は放課後学童に行くため、毎日、学校から、学童に近いバス停までバスを利用していました。学校から離れているためか、同じ学校で、その学童に行っている人は僕しかいなかったけど、何の問題もなく通えていました。

しかし、その日、バスから降りた瞬間、高校生が運転する自転車に当たり、体の小さかった僕は、簡単に跳ばされて、道路に倒れてしまったのです。幸い、帽子をかぶっていたので、大きな傷にはなりませんでしたが、頭から流れる血に気づいた時は、びっくりして泣いてしまいました。バスの運転士さんが、すぐに救急車を呼んでくれて、バス停のすぐ横の店のおばさんが、僕がどこの学童に行っているか知っていたので、学童に電話してくれました。

救急車が来た頃には、僕はだいぶ落ち着きを取り戻していて、救急車の中で、家族の連絡先も言えました。検査の結果、頭を打っていたものの異常はないということでした。事故から数日して急変する場合もあるということを聞いて、少し不安になりましたが、その後、傷も治り、心配するようなことはありませんでした。

しかし、僕の心には、僕が意識していないところで恐怖が残っていたのです。しばらくの間、自転車に乗ることができ

なくなり、歩いていて、自転車とすれ違うのが怖くなってしまいました。そんな僕を見て、親はすごく心配になったそうです。

「車に気を付ける」ことは、もつと小さい頃から言われてきました。が、自転車が起こす事故の怖さについて、その頃の僕は、よくわかっていませんでした。歩道とはいえ、バスを降りる前に確認をしなかった自分と、バス停にバスが停まっているのに、人が降りてくるかもしれないという意識がなく、スピードを落とさず通ろうとした高校生。その高校生にけがはなかったけど、小さい小学生を跳ねた形になり、ショックは大きかったようだったと、後から母に聞きました。一つ間違えば、また、相手がもつと体が弱い人だったら、命にかかわる事故になっていたかもしれないという、事故後の母の言葉忘れられません。

どちらか一方だけが悪いわけではありませんが、高校生とその家族の方が、すぐに病院に駆けつけてくれて、言い訳もせず、謝ってくれたそうです。結果的にけがをしたのが僕だけだったことで、その高校生が加害者のような感じになってしまったけど、僕自身が気を付けていれば、事故は起こらなかったかもしれないのです。また、高校生もヘルメットをかぶっていなかったもので、バランスを崩して大けがをしていたかもしれないのです。事故にあったことで、僕はいろいろなことを考えさせられました。

交通ルールを守るのは、誰かが見ているからではなく、ばつ則があるからでもなく、一番には自分の命を大切にするとめだと思えます。自分の命を守るという気持ちですが、他人の命

を大切にするにもつながると思うのです。今、たくさんの交通規則がありますが、残念ながら、交通事故は後を絶ちません。規則があっても、命を大切にするという気持ちがお互いになれば、そのためにはどんな注意や気配りが大切かを考えていなければ、事故は起きてしまうのです。規則にないことは気にしないでいいということではないということです。

時々、赤信号なのに、平気で渡っている人を見かけます。左右を確認せず、自転車で飛び出してくる人もいます。その時は大丈夫かもしれませんが。誰も見ていないかもしれません。でも、交通ルールを守るという気持ちがない人たちが、同じ道路に居合わせたらどうなるでしょうか。僕は、交通違反については、結果論で済ましてはいけません。心の問題として、危険な行為や交通違反をしても、人にけがを負わせなかったから、見つからなかったからいいだろうという罪の意識のなさは怖いと思うのです。自分の心の中で反省したり、もし事故を起こしていたらどうだろうと考えることが、本当の意味で、事故のない社会につながると思います。

僕は、事故にあつて初めて、ちょっとした確認や交通規則を守ることの大切さを痛感しました。また、心の傷を負うということも知りました。そして、バスの運転士さんや、お店のおばさんに見守られていることも知り、感謝の気持ちも生まれました。あの事故から6年が過ぎ、自転車への恐怖心も消え、何事もなかったように生活していますが、事故のことを決して忘れてはいけないと思っています。

自転車に乗る時の心掛け

新居浜市立川東中学校

二年 依岡 暖記

中学校に入学して自転車通学をするようになって、通りでは、「転倒した、ぶつかった。」と話で聞いたり、また目撃したりするようになりました。

保育園から僕は、父の趣味が「自転車」ということもあって、自転車の乗り方から自転車での交通ルールまで徹底的に教えられて、休みの日には、父の後に付いて新居浜市内を何時間も自転車を漕がされたことを思い出します。おかげで僕は自転車で転倒するとかぶつかるとかの経験を、中学入学するまではあまりしたことがありませんでした。

しかし、中学になって通学、部活動や遊びに友達と行動する機会が多くなりました。

いつしか父と一緒に走っていた自転車のルールや乗り方走り方が、いつの間にか友達と走って自分の走り方をおろそかにした時、友達の自転車と接触して転倒。大ケガにはならなかったけれど（すり傷、打ち身程度）、自転車はゆがみ、ブレーキは壊れ、痛みに耐えながら家まで帰りました。

仕事から帰った父は、転んだ理由は聞きませんでした、自転車をあつというまに分解してゆがんだ所やブレーキ等を直していききました。僕は言い訳のように、転んだ理由を話していました。自転車を直して試走をして帰ってきた父は、「ニコッ。」と笑って「よしっ。これでOK!。大事に乗ったら六年間は乗れるよ。」と言いました。そして、「どうして転んだか。

分かっているのか。」と聞かれました。「はい。」と僕は答えました。もっと怒られるのかなと思っていましたが、父は静かに「これだけでよかったな。」と言いました。

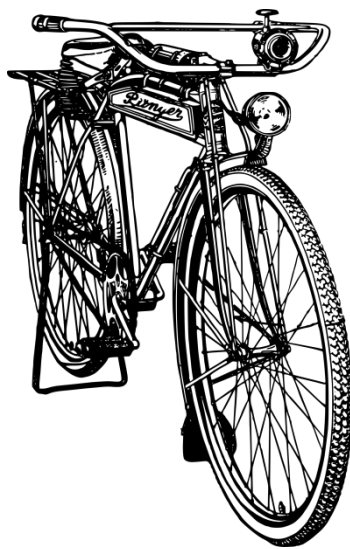
小さな頃から自転車で走る時は、いつも父が前や後ろを走って声を掛けてくれて、走り方や止まり方、曲がり方まで細かく教えてくれたから、小さい頃はあまり転ばずに走れたんだと分かりました。

そして、自分なりに思い出してみると、「どうして友達と接触してしまったのか。」「どうして転んだのか。」など考えていると、父からいつも言われているのは、「二列になるな。固まって走ってはダメ。自転車に乗ったら自分も運転手で、もし事故になった時、人にケガをさせてしまったら、君が責任を取らなければならない。もちろん君が大ケガしたり万が一のことがあってもいけない。」と。要するに僕が自転車に乗る限りルールを守る義務があり、責任が生まれるのです。

父は、車の運転もします。三十年以上無事故だそうです。自転車も四十年以上転んだことは無いそうです。車も自転車も時々スピードを出し過ぎたりすることもあり、僕が怖いなと思う時もありました。父に「どうしてぶつからないの。どうして転ばないの。」と聞いてみたことがありました。すると父は、その時は、まじめに答えなかったけれど、「経験、経験。」と何度もくり返し言っていたのですが、後でゆっくりと話を聞くと、「最低限のルールを守ることと、安全に走ることとを身体で経験して覚えていくことが大事。周りをよく見て危険を予知する力を付ける。そして、自分だけは大丈夫だとは決して思わないこと。」

まだまだ多くの話をされましたが、最終的には、自分の安全は自分で守るということです。通学、部活動と、友達と自転車で移動する時も、ちゃんと注意したり危ないと思った時は話し合ったりしたいと思います。

最後に、自転車に乗る時は、通学の時でもプライベートでもヘルメットをかぶって自転車に乗ることを約束したいと思います。



「ちよつとぐらい」が危険のもと

西条市立小松中学校

二年 大西 風花

私の中学校への通学手段は自転車だ。中学校に入学する前から、私はとても楽しみにしていた。スカートを翻しながら、さっそうと自転車を漕ぐ中学生の姿がとても大人っぽく見えたからだ。

だが、母が事故を起こさないと心配した。そして、毎朝、こう言った。

「気をつけてね。きよろきよろしたら、ダメよ。ちゃんと右左を見てよ。」

私は平気だった。「小学生のときだつて乗っていたんだから大丈夫！行ってきます。」と言つてさっそうと自転車に乗り、学校へ通つた。事故なんて起きるわけがない。そう信じていた。

そんなある日のことだ。いつもと同じ時刻に家を出た。すぐ近くの曲がり角のあたりまで進んだとき、後ろの荷台にくくりつけてあるはずの通学カバンがガタガタと鳴った。ふり返ると、荷台には通学カバンだけが乗っていて、荷ひも見あたらない。カバンをくくりつけるのを忘れていたのだ。私はこういう失敗をよくする。「またやってしまった。」私はすぐに引き返すことにした。

私の家はすぐそこだ。わざわざ反対側に渡るより、道路の右側を通つて帰る方が早い。私は一瞬ためらった。自転車は左側通行……そんなことは小学生のときから知っている。でも、早くしないと、学校に遅れてしまう。

そして、私の中で、「遅刻したくない」という気持ちで「左側通行」というルールに勝つた。ちよつとぐらい、いいよね。

右側を通つて帰ろう。そう思つて自転車のペダルをこぎ始めた瞬間、前方から私の方に向かって自転車が走ってくるのが見えた。とっさに私は右側にハンドルを切った。だが、前方の自転車も同じ方向にハンドルを切ったのが見えた。私は慌てて外側に寄り直した。が、相手も同じタイミングで外側に寄つた。そして、私と相手の距離はどんどん近づき、止まろうとしたときにはもう遅かつた。

ガシャン！音を立てて二人とも倒れた。私はすぐに立ち上がつて、「すみません！大丈夫ですか？」と声をかけた。相手も立ち上がつて「こちらこそすみません！」と頭を下げた。幸い、二人ともけがはなかつた。

それぞれの自転車を起こすと、その人は「急いでいるので行きます。すみませんでした。」と言つて、そのまま行つてしまった。私はしばらくその場から動けなかつた。心臓がバクバクした。足も少し震えていた。相手に大きなけがをさせていたかもしれないと思うと、とても怖かつた。どんなに急いでいても左側を走っていけばよかったとひどく後悔した。もちろん母にもすぐく叱られた。

一年経つた今、改めてあの事故を思い返した。すると、もっと怖いことに気づいた。

私の通学路は、自転車道と車道が分かれていない上に、細い。その道路を車がけつこうスピードを出して通る。あの日、私は無意識に右に寄つたけれど、相手も同じ方向に寄つて来たのは、道路にはみ出さないためだったからではないか。あ

の時、もし後ろから車が来ていたら、それがもっと大きな事故につながったかもしれない。また、倒れたときにもし車が来ていたらと思うと、本当にゾッとする。

「ちよつとぐらいなら。」なんて、軽く考えていた一年前の自分を改めて反省した。

私の「ちよつとぐらい」は、自分の安全だけでなく、他の誰かの安全をも脅かした。「事故を防ぐ」ということは、誰かの安全を守ることもあるのだ。

あんなことはもう二度と繰り返さない。そのためには、ルールを守り、軽はずみな気持ちを捨て、何があろうと冷静に判断することが大切だ。「ちよつとぐらい」こそが危険のもと。私だけでなく、誰かの安全を守るためにも、あの日の足の震えを、ずっと胸に刻んでおこうと私は決めた。

「父と献血」

愛媛大学教育学部附属中学校

二年 岡 愛奈

「パパは献血ができんのよ。」

「え?。」

「パパはね……。」

名医が神業的な手術をするといったテレビ番組を見ていたとき、父が昔体験した事故のことを話しはじめました。

父が免許を取って間もないとき、父は友達との待ち合わせに遅れそうになり、慌てて車に乗り込み、猛スピードで待ち合わせ場所に向いました。減速しないままカーブを曲がろうとした父は、急カーブを曲がる事ができず、縁石に乗り上げてしまいました。車から傷痕を見ていた父のところに暴走車が突っ込んできて、車は父を引いたまま走り、放り出された父の身体は血で真っ赤に染まり、ピクとも動かなかったそうです。

私はいつも時間にゆとりをもち、穏やかに運転している父の姿しか見た事がなかったので、この話を聞いて、慌てたり車を飛ばしたりしている父の姿は想像できませんでした。

その後、偶然通りかかった看護師の方が救急車が来るまでの間、応急処置をしてくださいました。そのおかげで命は助かったものの出血が酷く危険な状態は続いていました。救急車で病院に運ばれた父はすぐに出血箇所の縫合をし、3リットルもの輸血をしました。

献血の規定で、「輸血（自己血輸血を除く）や臓器移植を受けたことのある方は、現在の検査法では検出できない未知

のウイルス感染の可能性が考えられるので、献血をご遠慮いただいています。」という決まりがあります。父はそのため献血ができないのです。

命を救われた父は、後日数回に分けて身体の傷の治療をしました。左頬の骨折は、場所的に添木での固定ができないからなのか、口の中から皮膚を切開して、骨と骨をボルトで留める治療をしました。そのボルトは、今でも父の左頬に残っています。ボルトの違和感はないそうですが、健康診断をする度、レントゲンに映るため、事前に告知をしているそうです。

顎の陥没は、上下の歯と一緒に矯正することによって、顎を元の位置に戻すという治療を行いました。「い」と発音する口の形で一ヶ月固定したのですが、食事ができないため点滴と、流動食といって飲むヨーグルトのようなものを毎日、朝、昼、晩歯の隙間から飲むことによって栄養を摂取したそうです。

身体中に埋もれたガラスの破片は、事故後何日も経ってからも発見されることがあり、その度に切開して取り除きました。

祖母は、「変わってあげることができたら変わってあげたい。この子の命が助かるものなら自分の命は要らない。どうか神様助けてください。」と思ったそうです。容態が安定してからも、毎日「早くこの子の傷が治りますように。」と祈っていたそうです。その後祖母の願いが届いたのか、瀕死の事故に遭ったにも拘らず、父は驚異的な回復力で、三ヶ月で退院をしました。

それ以来父は事故の怖さを知り、安全第一で行動している

そうです。暴走しないのはもちろん、想像力を働かせ、もしもの飛び出し、もしもの急停車などにも気をつけているそうです。そして、父が何より気をつけていることは、時間と気持ちにゆとりを持って行動することだそうです。なぜなら、父が事故を起こしたのは、急いでいたからです。慌てれば確認不足になったり、イライラして車間距離が短くなったりして、事故をする確率が高くなるからだそうです。父は私と一緒に歩くとき、必ず車道側を歩いてくれます。それは私が車に引かれないようにするためです。私のことも気にかけてくれていて、出かけるとき

「車の確認をするんだよ。」

と、いつも声を掛けてくれます。

父が事故にあった話を聞いて、他人事だと思っていた事故は、すぐそこにあると知りました。父は私が事故に遭わないように気にかけてくれています。だから、私自身が気をつけないといけないと思いました。

中学生になった今、私は毎日学校に自転車で通学しています。私は朝、早めに家を出るようにし、必ずヘルメットを着用しています。交差点は止まって確認をし、小さな路地でもカーブミラーを確認しています。横断時は止まってくれた車の奥からバイクや自転車走っていないか確認をします。

父の事故で祖母が悲しんだように、私の事故で父や母、姉が悲しまないように、私も想像力を働かせ、交通事故に合わないように気をつけていこうと思います。

あの日から学んだこと

愛媛大学教育学部附属中学校

二年 明日 孝允

ニュースや新聞を見ると毎日「交通事故」という大きな見出しがある。なぜ毎日、世界のどこかで事故が起きているの不思議でたまらない。そんなことを思いながら、その記事やニュースを見ていた。しかしそんなある日、僕は「事故」というものの恐ろしさを知ることとなった。

その日、家を出発したのは七時三十分。学校に行く前に「安全運転で行ってらっしゃい。」

と母に言われた。毎日、毎日同じことを言われていた。だから僕は、

「大丈夫。分かつとる。」

とうんざりした声で返した。僕の家から学校までは約三十分かかる。その日は、雨が降っていた。そのためカッパの着用が必要だった。カッパの中からは自分の身の周りがあまり見えない状態であった。加えてその日はいつもより家を出る時間が五分程度遅かった。僕は、「急いで行けば二十分で学校に着けるだろう」と考えながら家を出た。しばらく直進した後、僕は曲がり角を右に曲がった。すると前から自転車が来ていた。しかし、僕は、距離感がつかめず、相手の自転車とぶつかってしまった。身体全体にかなり大きな衝撃を感じた。幸い相手も僕も転倒しなかったためケガはなかった。しかし僕の自転車のミラーが曲がってしまった。双方ケガがなかったため、その場を後にし、学校へ向かった。僕の腕にはとり肌が生っていた。ペダルを踏む足も震えていた。ぶつかった

時の衝撃のためかその頃になってようやく、自分の左肩の辺りが、ジンジン痛んできたことを感じた。僕はそれまでの自分の人生で経験したことのない自転車同士の正面衝突事故のおそろしさを知った。同時に母がいつも言っていた言葉の意味を理解した。

その日のことを思い出すと今でも身震いしてしまう。

僕は、この出来事から、交通安全について、もう一度しっかりと考えてみようと思った。どのようなことに気をつけると交通事故にあう確率が低くなるのか自分なりに考えてみた。

ひとつ目は、基本的な交通ルールの大切さだ。僕がこれを初めて学んだのは幼稚園の時だ。例えば誰もが知っている「左見て、右見て、もう一度左を見て車が来っていないことを確認して進む。」この行為はいたってシンプルだが自分の命を守るうえでとても大事なことだと思う。そのことを踏まえて今回の事故の原因を考えてみる。すると、基本的な交通ルールが守れていなかったことに気が付いた。そのため二度と僕が事故を引き起こさないために幼稚園の頃や小学校の頃にもらったパンフレットなどを確認した。これからだんだん大人になるにつれて自転車にとどまらず、自動車やバイクなどを運転する機会が多くなると思われる。だからどんな時でも基本的な交通ルールを意識して事故を防ごうと思う。

ふたつ目は、自分の命と同じくらい相手の命の重さを考えているということだ。今回の事故で、ぶつかった人のことを考えると学校に着いてから不安で授業を平常心で受けることができなかった。それは僕が相手の人にケガや打撲を負わせて

しまったのではないかという不安な気持ちがずっとぬぐえなかったからである。もしケガや打撲を負わせてしまったら相手の人の身体は大丈夫なんだろうか。入院が必要だったらどうしよう。もつと重大な事になっていたらと、相手の人の命を心配している自分がいたからだ。だから事故というのは恐ろしい。僕は事故の後、自転車運転する時にあることを考えるようになった。もしぶつかったら相手はどうなってしまうのだろうかということである。そう考えるようになってからは、自然と身の周りを確認するようになった

みつつ目は時間に余裕を持たせるということだ。僕が衝突したあの日は、時間に余裕がなくなりのスピードをだしていた。人は誰でも時間に迫られるとあせる。僕もそれが事故につながったのだと思う。時間のあせりをなくすためには、意識して時間を確認し余裕をもたせて行動することが大切だと感じた。これは何事にもあてはまると思う。時間に余裕を持たせることによって成功につながっていくのではないかと考えるからだ。

僕は、今回の事故でみつつのことを学んだ。それはどれも重要なことだ。僕は、学んだことをこれからの運転や日々の生活に生かしていこうと思う。世界のどこかでは、今この瞬間に事故が起きている。少しでも事故の件数を減らすためには、一人一人の意識の持ち方が大切だと思う。それが変わらない限り、世界から事故はなくならない。今回僕が学んだことを意識すれば自然と事故は減っていくだろう。交通事故がこの世界からなくなることを願って今日も僕は安全に気を付けて通学している。

「自分の命は自分で守る」

愛媛大学教育学部附属中学校

二年 今西 創大

ぼくは、「自分の命は自分で守る」という言葉をとても大事にしている。それは、「命は一つ」しかないからだ。ぼくが小学生だった頃の校長先生が集会で毎回のようについていた。それからいつもこの言葉がぼくの頭の中にある。命を無くすと死んでしまう。このかけがえのない一つの命を守るために、自分で出来る対策をしなければならないと思う。その一つに、交通ルールを守ることがある。

命の尊さを知った身近な出来事がある。それは今から六年ほど前、ぼくが小学校三年生だった時のことだ。兄が自転車事故にあった。兄は塾に行くために、急いで自転車をこいでいたそう。見えにくい近所の四つ角で、軽乗用車と衝突した。おそらく兄も一時停止していなかったのだろうし、車の運転手も左右の確認が甘かったのだと思う。母から聞いた話によると、車と衝突した衝撃はなかなかもので、車のスピードはあまり出ていなかったらしいが、兄の自転車はぐちゃぐちゃになっていった。それを見たぼくは、とても怖くなったことを覚えていた。兄は、車と衝突した時に、とっさに左手を道路についたようで、手首を骨折していた。しばらくはお風呂に入るのも着替えも通学も苦労していた。しかし、今思えば、これぐらいの怪我ですんでよかったと思う。当時、兄は通学以外ではヘルメットをしておらず、もし頭を打っていたら死んでしまっていたかもしれないからだ。

このような兄の事故があり、「交通ルールを守る」という

ことの重要性がさらに深まったように思う。

ぼくは通学に自転車を利用してゐる。学校でも自転車の乗り方の指導を受けてゐる。まずは自分が一番に出来そうな自転車事故を防ぐために必要なことを考えた。

一つ目はヘルメットの着用だ。もし事故や転倒で、頭部をぶつけた時に怪我や衝撃の程度はヘルメットの有無で大きく変わるからだ。また、ヘルメットは頭部が直接衝突することを防ぎ、衝突を緩和し外傷を最小限に留めることが出来る。

二つ目は交通ルールを守ることだ。例えばながらスマホをしないことが大事だと思う。時々、スマホの操作をしながら自転車運転している人を見ることがある。スマホに目がいっている時間は前を見ておらず、ぼくが歩行者の立場だった時にぶつかりそうになったこともあった。実際調べてみると、歩行者の見落とし回数は通常時「一・三回」から、ながらスマホ時「二・〇回」に増加し、率にして五割増となっていた。

また、死亡事故も報告されているらしい。ぼくはまだスマホを使用していないが、絶対してはいけない危険な行為だと分かった。他にも「車道が原則」「左側通行」「夜間はライトを点灯」「二人乗り禁止」「かさ差し運転禁止」など守らなければならぬルールがたくさんある。もう一度確認し、きちんと守っていきたい。

ぼくは、夏休みに広島へ家族旅行に行った。天気もよく、大好きなプロ野球観戦もでき、とても楽しかった。しかし、旅行中に気になったこともあった。しまなみ海道の終わりまでは、いつもと変わりなく運転していた両親だったが、山陽道に入ったとたん「運転、怖いわ」と言っていたことだ。ぼ

くも窓から様子を見てみると、急に交通量が増え、周りの車のスピードも速いような気がした。お盆だったからか交通量も多く、途中何度か渋滞もあった。電光掲示板には「〇キロ先、事故で渋滞発生」と書いてあった。早く目的地に着きたいのに、事故で渋滞なんかないかと思った。もし、この事故がなければ、渋滞しなかったかもしれない。事故は自分たちだけがつらいことではなく、周りにもたくさん迷惑をかけているんだと思う。その事故現場を通過した時には追突事故だったようで、前の車の後ろ部分が大きくつぶれていた。たぶん、この人たちも楽しいお盆休みを過ごす予定だっただろうにと思ったが、交通ルールを守っていれば事故は起こらなかったはずだ。車に乗ってる人は皆、難しい試験を受けて免許を持っている。「安全な速度と車間距離」「歩行者優先」など、数々のルールを守って、事故を起こさないよう責任をもって運転してほしいと思う。

このように身近な経験を通して、「自分の命は自分で守る」「命は一つ」ということの重要性を再び考えることが出来た。これからもこの言葉をいつも頭の隅にいつもおいて、交通ルールを守っていきたい。

交通安全について

松山市立内宮中学校

二年 越智 望愛

私の祖父は、姉と私が小学校に通っていた頃から登下校の見守りをして、横断歩道の所で旗ふりをして、雨の日も寒い冬の日も、暑い日も私達が事故にあわないように、安全のために見守りをしていました。

祖父が旗ふりをするようになった切っ掛けは、私達に通っていた小学校の道は、ちょうど車が通る裏道にあたり、朝、仕事に出かける車などがものすごいスピードで飛ばしてきたりして、とても危険な道だったからです。また、その頃のニュースなどで、登下校をしていた小学生の列に車が突っ込んで大ケガや亡くなったという痛ましい事がたくさんありそのため事故が起こってからは遅いということで登下校の見守り旗ふりを始めました。

学校で、私達は先生方に「白線の内側を歩きなさい。」とか、「一列に並んで歩きなさい。」と指導されていましたが、白線の道幅は狭まぐ、特に雨の日は、車が両方から突っ込んでくると、歩くスペースが全くありませんでした。車を運転している人も、通学路だと知っている人達は、スピードをおとしてゆっくりと運転してくれますが、何も知らない急いでいる人は、猛スピードで狭い道をとばして、何度か危ない目にあつたのを覚えています。そんな話を私達から聞いたり、町内の小学校に通っている保護者の方から話を聞いたりした祖父は、自分の目で確かめ、危ない箇所を取り上げ、公民館、安全協会、警察署、県議会議員の方々と話し合いを進め、

何年もかけて、私達の通学路の白線の道幅を広げてもらい、運転する方々に分かるように、三十キロ以上は出さないように、道路に規制をかけていただきました。それから、少し広くなった、白線の内側を通り一列にならんで登下校ができるようになりました。でも、これをしたからといって完全に事故が防げるとは言えません。今でも、毎日のように悲しい事故のニュースが耳に入ってきます。私達、歩行者がどんなに気を付けていても、運転するドライバーの方々も気を付けていないと、ちよつとした気のゆるみと、お互いを思いやる気持ちを持つことで、事故は防げると思います。

近年、交通事故で亡くなる方の割り合いがどんどん増えていっていると言います。今、私達が気をつけていることといったら、広がって並んで歩かない。横断歩道では、青信号になつたらすぐ渡るのではなく、一呼吸おいて渡るように心がける。また、自転車に乗っている時には、特に友達と並んで走行したり、かどを曲がったり、横断するときには、ゆっくりと走行したり、一時停止する気持ちを持って運転したりしないといけないと思ひました。また、最近では、片手にスマホなどをさわりながら自転車に乗っている人をよく見かけます。車にぶつかつて、ケガをしたりするだけでなく歩行者にぶつかつて加害者になる可能性もあるのです。耳に、イヤホンをつけて、音楽を聴きながら自転車を走行したり、歩いたりして、まわりの音が聴こえなくて、危険を察知することができません。ですから、自分達自身も、身の回りの事、思いやる気持ちを持って行動することで、事故が未然に防ぐことができるのではないのでしょうか。

今、祖父は体を壊して見守りや旗ふりを引退しました。でも、姉や私達小学生を毎日見守ってもらったおかげで、事故もなく安全に登下校ができたのだと思います。これからは、祖父にかわって、私達が安全な交通ルールを守っていくと共に、小さい子供達や後輩達にも教えていくことが大切だと思います。

一人一人大事な命です。事故は、ちょっとした油断と、気のゆるみからくるものです。皆が、悲しい思いや、嫌な思いをしないためにも、一人一人が気をつけて毎日を過ごしていけたらと思います。

祖父に、「長い間見守っていただきありがとうございます。これからは、お互いに気をつけて生活していこう。」と伝えたいです。私は、祖父にとっても感謝しています。本当にありがとうございますという気持ちでいっぱいです。



「自主返納のススメ」

愛媛大学教育学部附属中学校

三年 三原 心春

「更新はこれが最後と言っていた。返納するタイミングを逃してしまった。」

今年6月、神奈川県に住む90歳の女性が運転する車が歩行者を次々とはね4人が死傷した事故を覚えていている方も多いのではないだろうか。これはその事故の加害者の息子さんの言葉です。この女性は3月に免許を更新したばかりで、その際に義務づけられている認知機能検査では問題なかったそうです。昨年一年間に75歳以上のドライバーが起こした死亡事故は全体の3%と多く、年々増加しています。実際に高齢ドライバーの事故のニュースを目にすることも増えたように思います。この先ますます高齢化が進むことを考えても高齢ドライバーの事故や免許返納は深刻な社会問題になってくるでしょう。そうなった時私たち家族ができることは何なのでしょう？

私には73歳になる祖父と68歳になる祖母がいます。大分県の臼杵という町に住んでいます。山と海に囲まれていて市の中心部までは車で30分。どこに行くにも車を利用する為一台ずつ所有しています。二人共とても元気で運転に關しても心配はしていませんが、それでもニュースで高齢ドライバーの事故を見るたびにドキッとします。

この夏帰省した時、祖父に自主返納についてどう思うか聞いてみました。祖父の答えは『まだまだ大丈夫。』と遠い先の話のようでした。実際に80歳以上の高齢ドライバーの多く

が長年運転してきたのだからという自信とプライドを持っていて自主返納を受け入れられない場合が多いそうです。車の運転は自立しているという思いなのかもしれません。家族は『危ないからやめて。』と簡単に言いますが高齢ドライバーの気持ちを考えるとそんな簡単なことではないことを理解して話さないといけないと思いました。

また、返納が進まない別の理由としてその後の生活への不安が大きいに思います。私の祖父母もスーパーに病院にと毎日車を利用しています。祖父母にとって車は必要不可欠なものです。返納した後、誰が病院に連れて行ってくれるのか。そう考えると返納は難しいと祖父は言っていました。返納するメリットが何もないのです。しかし、今回自主返納について調べてみてそれぞれの県や市で返納した後の生活をどうサポートするか、いろいろな取り組みをしていることを知りました。

例えば、佐賀市では住民達が主体となって高齢者の送迎を行うという支援を始めたそうです。その財源は地域の人からの寄付やふるさと納税で行っているそうで、まさに町ぐるみで返納ドライバーのサポートにあたっているのです。このように県や市もただ単に『返納して下さい。』と言うのではなく、サポート体制をしつかり作ったうえで高齢ドライバーが安心して免許返納できる取り組みをして欲しいと思います。そしてそのメリットをドライバーにどんどんアピールして知ってもらうことが大切だと思います。

また祖父の話では、熊本県では免許更新時のサポートも行っているそうです。普通は更新の際、警察官のみが対応する

ところ、熊本県では看護師さんが同席して話を聞いてくれます。健康状態のカウンセリングも行われて看護師さんからすすめられたことで返納を決める方も多いそうです。そういう良い取り組みは今後どんどん全国に広がって欲しいなと思います。

今回、祖父母と車の運転や自主返納についていろいろな話ができ本当に良かったと思います。高齢ドライバーに限ったことではありませんが、事故のおそろしさ、加害者になること、また加害者の家族になることの怖さ。しっかり考えていかなければと思いました。事故が起こってからでは遅いのです。帰り際、今後運転を続けていくうえで祖父母と約束したことが三つあります。一つ目は、暗くなったら乗らない。なるべく昼間のうちに車の用事は済ませる。二つ目は、遠出はしない。遠くに行く時は公共の交通機関を利用する。三つ目は、体調の悪い時は絶対に乗らない、というものです。

私が祖父母と真剣に免許返納について話し合う日はもう少し先かもしれませんが、その時まで安全に安心して運転してもらえようしっかりと関わってサポートしていきたいなと思います。

高齢ドライバーのサポートも自主返納の取り組みも、家族だけががんばっても、地域だけががんばってもうまくいくものではないと学びました。免許も返納すればそれですべてが済むという訳でもありません。家族と地域全体で『車を手放した後の人生と一緒に考える』取り組みをしていきたいなと思います。高齢ドライバーもその家族もみんなが安心して免許返納できるそんな社会になるように。

私の願い

松山市立高浜中学校

三年 九鬼 千夏

今回、私がこの作文を書こうと決めたのは、「事故による被害を減らしたい」という思いからです。

ある日の夕方、母の携帯に一本の電話がかかってきました。それは、母の友人のご主人が、相手の信号無視によって事故で亡くなったという知らせでした。その方は四人の子供の父親で、まだまだこれからという年齢でした。

電話の翌日、涙で腫れた目で友人の家から帰ってきた母が教えてくれたのは、とても悲しい話でした。

「いちばん下の子がね：『お父さん、起きて』って言って：親の死が分からないくらいまだ小さいのにね：」

私はこの話を聞いて、心が苦しくなると同時に憤りを覚ええました。「なぜ何もしていない人が死なないといけないの？」「何でこの家族が悲しい思いをしないといけないの？」そういう思いが次々と頭に浮かびました。この作文を書いている今も、事故によって亡くなった人のニュースが流れています。「もしも家族の誰かが事故に巻き込まれてしまったら：」と考えると、同じように、いやそれ以上に悲しさと怒りでいっぱいになると思います。全国で三千六百九十四人。事故による死者の数を表すことは簡単です。しかし、その何倍も、何十倍もの人の心に痛みを残しています。

信号無視以外にも、自転車やバイクの衝突事故など、様々な原因で亡くなる人がいます。特に最近では、高齢者が関係する事故が多いそうです。少子高齢化社会だからこそ、交通に対する意識を高めなければいけないと思います。また、車

が原因で死んでしまった鳥や猫が道路に横たわっているのを見ると、とても可哀想で悲しい気持ちになります。便利な世の中だからこそ、人や生き物の命を簡単に奪うことのできるものが多くなっています。「今の世の中『絶対』というのはない。」祖母の口ぐせです。まさにその通りだと思います。私たちの生活はいつも危険と隣り合わせです。いつ事故に巻き込まれても、巻き込んでもおかしくない状況にあります。だからこそ、一人一人が交通安全の意識をもって生活すること、私たち自身を守るためにとっても大切だと思います。

中学生にとっていちばん身近な乗り物は、自転車です。私も買い物に行ったり、遊んだりするときによく利用します。しかし、考えてみると、歩行者の命を奪ってしまう加害者になることもあれば、車やバイクとの事故で命を落とす恐れがある大変危険な乗り物だということに気付きました。そこで私は、次の三つのことに気を付けたいと思います。

一つ目は、交差点での安全確認です。交差点は、いちばん事故が多い場所です。信号が青でも、母の友人の事故のように信号を無視する車もいます。一時停止し、左右をしっかりと見て、安全を確認してから横断するようにしたいです。

二つ目は、左側通行です。それを守らないと、他の自転車や歩行者と衝突する危険があるので、自分と他人の身を守るために、必ず左側を走るようにしたいです。

三つ目は、スマートフォンを操作したり、音楽を聴いたりしながら乗らないことです。何かをしながら自転車に乗っていると、周りの気配を感じることができず視野が狭くなったり、音が聞こえなかったりして大きな事故につながります。運転に集中し、正しい判断ができる状態を保つようにしたい

です。

その他、二人乗りや夜間の無灯火など危険な運転もせず、「交通ルールを守る」のが当たり前にできる自分になります。それに加えて、自分の身を守るためにヘルメットを着用したり、警察署のwebページを見て交通安全に関する新たな情報を確認したりしたいです。

また、学校の登下校などで歩く機会も多いです。自転車と同様、交差点ではしっかりと左右を見て安全確認を行い、右側通行はもちろん、歩道などできるだけ安全な所を通るようにし、事故に巻き込まれないように注意したいと思います。

今回この作文を書いたことで、交通安全に対する考えや意識を高めることができました。道路交通法が改正され、年々事故による死亡者は減ってきていますが、まだまだたくさん事故が全国で起きています。一人一人が交通安全にしっかりと向き合い、高い意識を持つことが事故を減らすためには大切です。命はたった一つ。自分の行動が誰かの命を奪うものではなく、誰かの命を救えるものになればいいと思います。事故が無くなり、笑顔が広がりますように。

車の免許返納は必要？

八幡浜市立真穴中学校

三年 松良 凜々子

近年、少子高齢化がどんどん進んでいるが、ここ数年、アクセルとブレーキを踏み違えたり、高速道路を逆走したりという、高齢者による事故のニュースをよく耳にする。そのニュースの中で話題にあがるのは、高齢の運転免許保有者の増加についてだ。昔と現在との運転免許保有者数を比べると、全体の保有者数の大きい増減は見られないが、高齢者に限れば断然現在の方が多い。そして、近い将来、以上に増える傾向にあることがわかった。年を取れば、身体の動きもおぼつかなくなるし、視力や聴力なども悪くなる一方だろう。どうして高齢者は、免許を返納しないのだろうか、疑問に思った。私は、免許を返納した祖父と、まだ運転を続けている祖母に話を聞いた。

私の祖父は、十年ほど前に両目が緑内障になり、視野が狭くなっていく。だから、それまで乗っていた車の免許を返納した。私の家がかん農家なので、それまでは車で手伝いに来てくれていたが、危ないのでやめてもらった。バスで来ることまでできるが、急な斜面でのみかん採りは危険なので、手伝いを止めた判断は正しかったと思う。祖父は、今でも元気に過ごしているが、祖父のように、何らかの事情でやむを得ず車に乗れなくなったり、危ないと判断して免許を返納したりする人も増えてきているようだ。

しかし、車がないと不便になる人が多いのも、事実だ。一緒に住んでいる祖母は、八十歳近くになったが、まだ車の運

転をしている。バイク、軽トラックにまで乗り、山で元気にばりばり働いている。そんな祖母だが、運転するときは、事故に遭わないようにゆっくり走ろうと心掛けているそうだ。若い子たちがスピードを出していると、運転するのが怖くなることもあると言う。自分では左右確認をしたつもりだが、危ないと思うことが何度もあったそうだ。そんなこと聞いたことがなかった私は、元氣な祖母でも、車を運転することに不安を抱えているんだと思った。祖母が運転を続けることが、とても心配になった。

七十五歳になると、免許更新のときに、認知機能検査と高齢者講習を受講しないと免許証の更新ができなくなった。加齢に伴って認知症や身体機能の低下が自動車等の運転に影響を及ぼす可能性があるため、それらを高齢者の方に理解してもらうために行われているそうだ。高齢者が事故を起こさないようにすることは、高齢者自身を守ることもなるので、必要なことだと思う。祖母は、高齢者講習を受けているわけだが、教習所の先生に「左右確認が早すぎる。」と言われたそうだ。自分ではできているつもりでも、確認不足だということだ。中には、九十歳の方も免許の更新に来ていたと聞き、とてもびっくりした。自信を持って運転できているのだろうか。なぜ、まだ車の運転を続けるのだろうか。

祖母に聞いてみると、農家の方が多いそうだ。免許を返納すると、山まで歩かないといけないし、収穫したものを選果場や青果市場まで運ぶのも難しくなってしまう。仕事に限らず、病院や買い物に行くときには、一時間に一本のバスに乗らなければならない。すごく不便だ。そして、一番の理由は、家族に迷惑を掛けたくないからだという。祖母も、危ないか

ら免許を返納したいという思いもあるらしいが、迷っているようだ。祖母の気持ちもよくわかるけれど、私は祖母に、安全に暮らしてほしいと思う。

私たちの住む地域には、信号がなく、道路幅が狭いが、車の通行量は結構多いと思う。ほとんどが一車線で、車の離合が難しい場所も多い。そんな道路を、秋・冬のみかんの出荷時期になると、たくさんトラックが行き来する。地域に住むこの道に慣れ親しんだ方は、あまりスピードを出さず、安全に運転してくれることが多いが、たまにヒヤツとすることもある。自転車で部活動に向かうとしたときのことだ。私は、家の前の路地から道路に出るときに左右確認せず、車にぶつかりそうになったことがある。もちろん、私が悪い。また、登校中の私たちの真横で車同士がすれ違うときには、要注意だ。私たちが、ガードレールとよけようとした車に挟まれそうになり、本当に危なかった。道路を広くするのは難しいだろうが、せめて、学校付近だけではなく、通学路にもつと歩道があればいいなと思う。誰も事故なんて起こしたくないはずだが、残念なことに、事故はなくなるならない。ちょっとしたミスの重なりで、交通事故は起こるのだろう。これからも事故に遭わないよう、交通ルールを守ろうと思う。

私の祖母は、車の免許を返納するか今も迷っている。不便にはなるだろうが、少しでも運転に不安を感じるのなら、決断する勇気をもってほしい。家族みんなが安全に、安心して過ごせるように。

自転車に「TSマーク」を貼いましょう！！

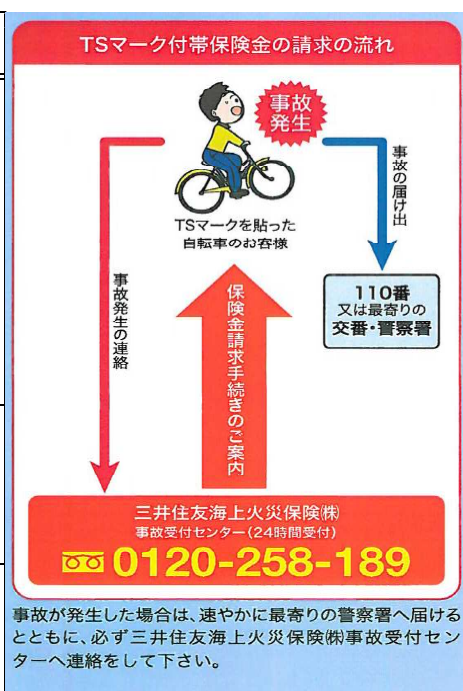
◇ TSマークには保険が付いているので安心

- 年に1回、自転車安全整備店で、点検・整備を受けると、そのしるしとして「TSマーク」が自転車に貼付されます。
- 「TSマーク」には、賠償責任保険と傷害保険の2つがセットになった1年間の付帯保険が付いているので、もしもの時に安心です。
- お近くの自転車安全整備店へご相談ください。



◇ 付帯保険の補償内容が変更(H 29.10.1 ~)

補償内容	補償額等
① 賠償責任保険 (被害者が死亡等した場合に法律上の損害賠償責任を負った時の補償)	○ 死亡・重度後遺障害 (1~7級) 限度額 5千万円 ↓ (変更) <u>限度額 1億円</u>
② 傷害保険 (自転車利用者が死傷等した時の補償)	○ 入院15日以上 10万円 ○ 死亡・重度後遺障害 (1~4級) 100万円
③ 被害者見舞金 (被害者が入院した時の見舞金)	○ <u>入院15日以上 10万円</u>



「思いやり1.5m」運動の実践を！



愛媛県では、「愛媛県自転車の安全な利用の促進に関する条例」の基本理念として、歩行者・自転車・自動車等がお互いを思いやり、安全・快適に道路を共有する「シェア・ザ・ロード」の精神の普及に努めており、ドライバーの皆様には、自転車を追い越すときの事故防止のため、「思いやり1.5m」運動の実践を呼びかけています。

ドライバーの皆様は、自転車の側方を通過するときは1.5m以上の安全な間隔を保つか、道路事情等から安全な間隔を保つことができないときは徐行していただきますようお願いします。

交通安全年間スローガン最優秀作

○ 子供の部門（小・中学生からの応募）十五年間の内閣総理大臣賞

平成	十七年	よくみてね！ いっぱいのぼした もみじのて
同	十八年	手を上げて しっかり見よう 右左
同	十九年	青だけど 車はわたしを 見てるかな
同	二十年	点めつだ 一度止まって 次の青
同	二十一年	じこがない そんなまいにち うれしいな
同	二十二年	さあかくにん ライト ブレーキ ヘルメット
同	二十三年	星キラリ 自転車ピカリ 帰り道
同	二十四年	いそいでも かならずかくにん みぎひだり
同	二十五年	ヘルメット ぼくのだいじな おともだち
同	二十六年	につぽんを じまんしようよ 事故ゼロで
同	二十七年	ルールむし しん号むしは わるいむし
同	二十八年	しんごうが あおでもよくみる みぎひだり
同	二十九年	ペダルこぐ 免許はないけど ドライバー
同	三十年	自転車は 車といっしょ 左側
同	三十一年	とび出さない いったんとまって みぎひだり

～ 愛媛県交通安全協会ホームページ

広告協賛事業所 ～

【四国中央市】

金生運輸(株)
四国紙販売(株)
大王製紙(株)
丸住製紙(株)

【新居浜市】

一宮運輸(株)
(株)大石工作所
桑原運輸(株)
住友化学(株) 愛媛工場
住友共同電力(株)
住友金属鉱山(株) 別子事業所
住友重機械工業(株) 愛媛製造所
新居浜工場
宝運送(株)
東予信用金庫
日泉化学(株)
(株)ハタダ
(株)三好鉄工所

【西条市】

(株)田窪工業所

【今治市】

(株)IJ C
一広(株)
今治造船(株)
今治ヤンマー(株)
渦潮電機(株)
(有)大沢食品
四国ガス(株)
四国通建(株)
四国陸運(株)
瀬戸内運輸(株)
太陽石油(株) 四国事業所
波止浜興産(株)
真鍋造機(株)

【松山市】

あいおいニッセイ同和損害保険(株)
アカマツ(株)
アサヒビール(株) 松山支社
(株)アテックス
アトムグループ
(株)アベホンダHonda Cars 松山北
池田興業(株)四国支店
(株)井関 松山製造所
(株)伊予銀行
(株)伊予鉄グループ
(株)NTTドコモ四国支社 愛媛支店
NTT西日本
(株)エヒメエレクトロメンテナンス
愛媛近鉄タクシー(株)
(株)愛媛銀行
(株)愛媛CATV
(一社)愛媛県警備業協会
(一社)愛媛県自動車整備振興会
愛媛県遊技業協同組合
(株)愛媛新聞社
愛媛信用金庫
愛媛総合警備保障(株)
愛媛ダイハツ販売(株)
愛媛トヨタ自動車(株)
愛媛トヨペット(株)
愛媛日産自動車(株)
オオノ開発(株)
(株)門屋組
(株)ガリレオコーポレーション
国際警備保障(株)
JA共済連 愛媛
JAバンクえひめ
四国電力(株) 愛媛支店
四国名鉄運輸(株)
四国旅客鉄道(株)
JAF愛媛支部
(株)スズキ自販松山
(株)セキュリティエヒメ
セコム(株) 松山統轄支社
(一社)全国道路標識・標示業
四国協会 愛媛県支部
全国農業協同組合連合会
愛媛県本部

DCMダイキ(株)

(株)たいよう共済 愛媛支店
帝人(株) 松山事業所
テルウェル西日本(株)
トヨタ L&F 西四国(株)
(株)トヨタレンタリース西四国
南海放送(株)
日本郵便(株) 四国支社
(株)風土
フェイス・ソリューション・
テクノロジーズ(株)
(株)フジ
(株)フジセキュリティ
(株)フードサポート四国
ヨシケイえひめ

三浦工業(株)
(株)村上モーターズ
(株)四電工 愛媛支店
(株)レディ薬局

【伊予市】

カネサ運輸(株)
山陽刷子(株)
マルトモ(株)

【伊予郡松前町】

東レ(株) 愛媛工場
日章(有)

【大洲市】

(株)一宮工務店

【八幡浜市】

(株)サンリード
八水蒲鉾(株)
堀田建設(株)

【宇和島市】

宇和島自動車(株)
宇和島信用金庫
ベルグアース(株)

(平成30年12月末日現在)

交通安全活動を支援しています。

一般社団法人
愛媛県交通安全協会
Ehime Traffic Safety Association

〒799-2661 愛媛県松山市勝岡町1163-7

TEL: 089-979-2101

